
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A・I・N -

【Nコード】

N7562Y

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

一人のレイヴンの元に、一つの依頼が舞い込む、
「貴方にお願ひがあります」
オペレーターの冷たい声に、男は軽く溜息を吐いた。

- Mission 1 - 長い一日（前書き）

書き方が特殊なので見辛いかもしれません。
それでもご覧頂ける方には感謝を。

- Mission 1 - 長い一日

- - 雨が降っていた 空を覆うのは 灰色の雲……

雨が降っていた

降り止む気配は無い

外を見る 辺りは一面の砂

興味を引くような物は何も無い

目を閉じる 雨音が聞こえる

その音に耳を傾ける

一定のリズムで 雨は機体を打つ

そのリズムが心地良い

時刻 14:30 天候 雨

漆黒に彩られた機体の腹の中

操縦席のシートに 深く身を沈める

聞こえてくるのは水の音

目に見えるのは 崩れ埋もれたガレキだけ

” ザーム砂漠 ”

昔は都市であつたであろう面影だけを残し

今は 砂と石に覆われた世界

辺りに人の姿は無い

人間はこの土地を捨てた 用無しと言わんばかりに

そして 西に新たな楽園を求めた 人の住む都市

” ネオ・アイザック ”

新たに創られた人の巢は そう呼ばれている

ネオ・アイザックに向かおうとしているヤツがいる

そいつを口説いて落す これが今回の依頼

あまりにも衣装が派手なので 都市には入れたくないらしい

ヒドイ話だ…

この砂漠のど真ん中 既に1時間以上待っている

約束の相手は まだ 来ない
…

小さく電子音が響く 味気の無いコールサイン

『大丈夫ですか？』

それに続いて女性の声 その声もまた 味気無い

モニターに映った彼女が 切れ長の目で見つめてくる

だがその瞳は 何処か虚ろで無機質

それを隠すかのように掛けられた 縁無しメガネ

流れるように顔に掛かった綺麗な黒髪を

彼女は鬱陶しそうに横に撫で付けた

ついでそのまま 軽くメガネを押し上げる

彼女の容姿は上の部類だと思う まさに冷艶

だが 全体的にキツイ 冷淡な印象を受ける

その理由は 多分これだ 彼女には表情が無い

彼女の顔に 感情が浮かんだ所など一度も見た事が無い

笑顔なんて見たことすら無い　泣き顔なんて論外だ

それはまるで　生身の女性と言うより　綺麗な彫像

そんな　美しくも素っ気無い顔を眺めながら　思考の中へと埋没していく

彼女は言った　『今回のミッションだけは　お手伝い致します』と

何故？　真剣に悩んでしまう　事あるごとに邪魔ばかりするくせに

今まで役に立った事なんて　数える程も無いくせに　何故…？

……と言つかこの女　本当にオペレーターなのか？

『大丈夫ですか？』

再度　同じ問い掛け　聞こえていないと思ったらしい

「…聞こえてるよ…ニーナ」

【ニーナ】

それがこの　オペレーターとは名ばかりの女の名前

彼女は　『そうですか』　と言った後で

『でしたら』　と　続けた

『答えて下さい　大丈夫ですか？』

それに 一拍置いて答える

「…………何が？」

ニーナが溜息を一つ 小さく漏らした

彼女は感情を 表情に出す事はまず無い

だが 雰囲気と瞳に如実に現れるのを知っている

今がまさにそう まるで馬鹿を見るような目を向けてくる

冷たい印象が 更に冷たさを増してくるのがモニター越しに分かる

『準備は出来ているのかと聞いているのです』

苛立たしげに彼女は言う だからこう答える

「見ての通り」

『解りません』

「…………残念」

ニーナを無視して 今回の依頼をもう一度 頭の中で整理してみる
まず どうかのバカが 何に使うのかは知らないが

大型の移動兵器を開発していたらしい

その大型移動兵器を 製造途中に別のヤツが破壊した

……しかし 再起不能 とまではいかなかった

お陰でこうして 初めてのオツカイが出来るまでに回復した

その行き先は ” ネオ・アイザック ”

買い物にしてはちょっと大袈裟すぎる

止めたいと思うのは まあ 当然だろう

「仕事は最後までやるもんだろ……」

破壊し損ねたどっかのレイヴンへ 文句と舌打ちを送る

『大型移動兵器の事ですか？』

独り言が聞こえたらしい

「……ああ」

曖昧に頷く 確かに間違っではないが 正しくも無い

でも訂正するのも面倒で 彼女の問に 適当な相槌を返す

『今回の目標について なにか質問が？』

やはり無表情だった 動くのは 瞳を覆う瞼の その瞬き位のもの

彼女と会話していると 機械が何かと会話している錯覚に陥る

「いや……」

質問 と言われても ココに来る途中で一通り聞いてある

今更 聞く事なんて無いが……

「そうだな もう一度確認だ」

彼女は俯くと 目の前のコンソールでも弄っているのか

何かを打ち込んでいるような 小気味良いリズムが聞こえてきた

『どうぞ』

彼女が顔を上げる 質問を待っていた

頷いて 「それじゃ」 と言って続ける

「目標の名前は？」

『グレイ・クラウド』

「大きさは？」

『詳細なデータはありません が A Cの軽く3倍以上はあると思います』

「…それで” Gray Cloud（灰色の雲）” ね」

思わず空を仰ぎ見る

『他には何か？』

彼女の声に 視線を戻す 口元に手を置いて考える

「そうだな……」

目標の獲物を再確認してみよう 何せ相手のセンスは最悪だ

仮装パーティーにでも呼ばれたかと疑いたくなる程派手な衣装

「ソイツの武装について」

彼女は再度 コンソールを操作する

普段は虚無を映しているその瞳に

今は 様々なデータが映り込んでいた

『製造途中のデータしかありませんが 宜しいですね？』

顔を上げて彼女は問う それしか無いんじゃない仕方が無い

「ああ」 一つ頷いてみせる 彼女は続けた

『まずは 両腕からはグレネード弾 連射が可能です

次に エクステンションからは エネルギー系のマシンガン

更に本体上部 左右に8連ミサイルポット

最後に 目標本体から小型自律兵器の射出が可能 以上です』

モニターに映った情報を ニーナは一気に読み上げた

そして彼女は顔を上げる 同時に 彼女へ両手を上げてみせた

「ご立派 とても普通の兵器じゃ太刀打ちできないな」

呆れた笑いが込み上げる 連射が可能なグレネード弾？

祝砲にしちゃ賑やか過ぎだろ 花火にしても五月蠅過ぎる

それに加えてENマシンガン ミサイル ビット……

まったく オツカイじゃなくて 兵器の押し売りにでも行くつもりか？

仮装パーティーにしたって派手過ぎる 他の客が目を回すぞ

そんなんじゃ 門前で追い返されるのが関の山だ

『……ああ だからココに居るのか』

黒服姿で待つてる理由を 改めて納得した

次いで 無表情の仮面をつけた女が言う

『その通りです ところで……』

三度コンソールを弄る 唐突に深い溜息

『今回も その機体で出るつもりですか？』

『ん？ 何か問題でも？』

どうやら彼女は 今回もお召し物が気に入らないらしい

『武器はブレードだけ ですか……』

『素手よりは マシだろ？』

肩を竦めて答えてやる 軽口を添えながら

A Cのアセンブルは パーツの数と人の数だけ存在する

武器だって ライフル マシガン バズーカ ミサイル e t c

使う戦術・兵装 そのスタイルによって 呼称も様々用意されている
銃をメインで使うならガンナー ミサイルが大好物ならミサイラー
と言う具合に

強力なものから連射の効くモノまで どれを使うかはレイヴンによ
って様々だ

……それだけ武器があるにも関わらず　いつも使うお気に入り
はただ一つ

左腕にブレードだけ　後はせいぜいリーダー位　他は何も積まない

彼女はいたく　それが気に入らないらしい

でも　このスタイルだけは譲れない

イカレてると言われても　馬鹿だと蔑まれても

あの人に近づくためなら　なんでもやる

あの人みたいに　強くなれるなら……

だから仕事はこの機体で出る　それでも何とかなる

もし出来なくとも　何とかする　それが　レイヴン

【レイヴン】

企業や政府に雇われる者を　こう呼ぶ　要するに　傭兵

金さえ貰えればなんでもやる　仕事は確実に　こなす

それが出来なければ　死ぬだけ

『無茶ですね』

唐突に 遠慮も無くニーナは言う

瞳には いつも通りの無言の罵倒

「無理じゃあないさ」

彼女は諦めにも似た溜息を吐き 首を小さく横に振る

それっきり ニーナは黙ってしまった

沈黙の重圧がコクピットの中を覆う

青白い人工の光に照らされたニーナの顔を呆と眺め

……ふと そこでさっきまで考えていた事を思い出す

何故 今回に限って これだけ彼女は協力的なのか？

心配だから？ 死ぬかもしれないから？

有り得ない それは確実に 有り得ない

今までの仕事を思い出す 思わず身震い

あれはいつの事だったか 彼女は言った『敵機残り3機です』

それがどうだ 増えるわ増えるわ敵援軍16機

「どう言う事だ?!」 慌てふためきながら問い質した事があった

その時ニーナは何て言った？ その答えは至って簡素なものだったろ

『忘れてました』 たった一言 次に 『頑張ってください』 以上
終わり

何とか全機撃破 ディスプレイを殴りつけながら彼女を呼んだのを
覚えてる

あの時のあの表情 そしてあの言葉 あれは絶対本気だった 断言
できる

彼女はいつもの無機質な 虚無的な目で たった一言

『生きてらしたんですか』

あの時ほど ニーナに殺意を覚えた事は無い ついでに恐怖も……

それに… そうだ あれだってそうだ 他のレイヴンとの共同作戦

もう1人来るからと デートの待ち合わせをしてた時の事だ

突然 上から横から3機のACが飛び込んできた

驚きながら彼女に聞いたよな 「どいつが味方だ?!」 って

そしたら彼女はまたしても たった一言 『さあ?』

「フザケるな！」 怒鳴ろうとしたら 戦闘開始

それも 3機同時の多人数プレイ 味方なんていやしなかった

……あれは…ヘヴィだった……

それが今までの彼女の所業 下手したら10回以上は死んでいる

それ程までに 彼女のよこす情報はヤバイ 正確性の欠片すらない

……欠片くらい 有っても良いんじゃないかな……？

それがどうだ？ 今回に限っては正確 いや 正確過ぎる

確かに 大抵の事は依頼主である監督局から聞いてある

しかし それは最低限の事だけだ ヤツがネオ・アイザックに向かっている

通常の兵器ではまるで齒が立たない だからレイヴンに頼む これだけだ

グレイ・クラウドの武装についても ニーナから聞かされた

ヤツの武装データなど極秘中の極秘の筈 それを何故？ どうやって？

製造途中なんて言うてはいるが それにしたって完璧すぎる

ニーナの顔をマジマジと見ながら 意を決して問い質す

モニターの向こう 光を反射しながら 彼女の瞳が青く揺らめいていた

「……一つ 聞いても良いか？」

『却下します』

即答 思わず頭を抱える

相変わらず取り付く島も無い

溜息を吐きながら それでも彼女の瞳を見つめる

今回は本気だ と言う事を 言外に伝えてやる

『解りました』

ニーナは目を伏せると 小さく吐息

珍しく 彼女が折れた

『それで 何をお聞きになりたいと？』

「ああ」 言った後 生唾を飲む 彼女とこう言う会話をすると

どうもプレッシャーを掛けられているような気がしてならない

「……なんで今回に限って これほど協力的なのか」

その間に 不意に彼女の瞳の色が変わる

この男は 何を言っているんだ？ そんな感じに

『オペレーターですから 当然の事では?』

「どの口で言ってたんだよ!」

思わずディスプレイを叩きながら 怒鳴り声を上げてしまう
と言うか コイツにオペレーターの自覚があつたなんて……

その怒声にも やはり彼女は表情を変えない

「それで? 本当の所は?」

息を吐く まあ 感情が解らないのも 表情が読めないのも
言ってしまうばいつもの事だ 今更気にしたって仕方が無い

「……言えない?」

目の前のコンソールに腕を乗せ モニターに顔を近づける

見つめ合うこと数秒 甘さには程遠い時間の後

『 ……いえ 解りました お答えします』

目を瞑る 開ける そしてニーナは口を開いた

『貴方の事が……』

そこで彼女の言葉に割り込んで喋る ンな訳あるか

「心配ですから　なんて答えは無しだ」

小さく舌打ちが聞こえた　表情は変わらずに

「…………お前なあ…………」

怒りを通り過ぎて　思わずガツクリと肩を落す

『…………… 解りました　正直に言います』

大きな溜息　今度は正真正銘　観念した　そんな雰囲気を漂わせる

勝った　仕事が始まる前なのに　そんな充足感で一杯だった

「ああ　頼む」

緩みそうな顔を必死に堪えながら促す

それを見て　ニーナは訝しげな表情を浮かべる

次いで　何を馬鹿な事を考えて…………… そんな目をしていた

素知らぬ顔でやり過す　「で？」　と彼女に話を促す

『アレは害悪です』

彼女の顔から　それこそ一切の表情が消える

一点を見つめる瞳は　何処か別な場所を見つめているような

様子の変わった彼女から発せられた言葉は　やはり変わっていた
それは全く意味不明　思わず眉を顰め　首を傾げながら問い返す
「害悪？」

害？　妨げ　支障　災　物事の妨げとなるような悪い事

頭の中で　その単語の一般的な意味を思い浮かべる

いや　確かにアレは　ネオ・アイザックにとっての脅威だろう

害になると言うのは解る　でも　しかし……

「……それは　誰の？」

彼女がまさか　都市の人間の事を心配するとは思えない

いや　それは流石に言い過ぎだろうか？　もしかしたら優しい心も

……

『決っているでしょう？　我々のです』

さも当然　と言わんばかりの表情を浮かべながら　ニーナは言った
意味が分からない　我々？　自分達と言う意味か？　ニーナも含め
て？

「我々ってのは？　都市の人間？　それとも　企業？」

彼女が一瞬 視線を外した　すぐに戻す

それは隠し事や　言い辛い　そんな感じじゃない

何だ？　探るような視線を向ける　それを彼女は躲す

『それは　勿論　』

一拍溜めて彼女は続けた　次の言葉を待ち受ける

…だが　残念ながら　その時は来なかった

突然のサイレン　甲高い警告音

コックピットの中で喧しい音が響き渡る

続いて別の女性の声

【テキ　セツキン　キケン　キケン　キケン】

機体の頭部　そこに備えられたAIからの警報

目の前のオペレーターよりも　よっぽど頼りになる彼女が叫んだ

『どうやら　お喋りはここまでのようですね』

二ーナの言葉に　皮肉を込めて鼻を鳴らす

どうせ敵が来る事を知っていたんだろう

さっき目を逸らしたのは レーダーを見るため

オペレーター側のレーダーは 索敵範囲がACのそれよりも広い
敵の挙動をいち早く知る事が出来る

二ーナより そのレーダーだけ欲しいよな……

「……仕方ない」

今日 何度目かの溜息 まあ どちらにせよ

そんな高望みを言っただけ それこそ 仕方が無い……

……せめてオペレーター 変えてもらう事 出来ないのかな？

『では 無事に帰還できるよう 祈ります』

そんな嘆きの思考に割り込むように 彼女は無表情でそう言った

「お前が？ 誰に祈るんだ？」

そう問い掛けようとして 止めた

別に他人が何を信仰していたって構わないと思っている

だから それはどうでも良いと 問うのを止めた

他に聞きたい事は山ほどある さっさとお客を片づけよう

色々聞くのは それからでも遅くは無い

喋るかどうかは別として だが……

オペレーターの冷たい声が消える

入れ替わりに ノイズ交じりの女性の声が 耳元で囁く

【システム キドウ】

戦闘の合図 戦いが 始まる

- Mission 1 - 長い一日（後書き）

かなり前に書いていた小説です、直しと復習を兼ねて投稿させて頂きました。

ご覧のとおり句読点などを省いているので見辛いかと思います、それでも読んで下さった方、ありがとうございます。

話数が結構ありますので、時間がある時に上げていきたいと思えます。

- Mission 1 - 灰色の雲

低い唸り声が聞こえる 姿はまだ無い

音が聞こえる 音だけが聞こえていた

ACのブースターにも似たような音

距離はまだあるようだが……いや 見えた

まだ待ち合わせ場所には遠い

それでもあの大きさか……

「ヤツとの距離は？」

二ーナに向かって距離を問う そして
：

『距離 1500』

後悔する

「……………1500……それであのデカさ……」

あまりの事に レバーを握る手が汗ばむ

それが 徐々にコチラに向かってやって来る

「ニーナ 距離を報告 2000 ずつ」

顔は上空を向け 目だけニーナに向ける

それに 伏目がちに彼女は応じた

『解りました 距離1000』

いや 徐々に なんて速さじゃない

「おいおい……」

グレイクラウド 彼女は脚が自慢らしい

『距離 800』

速度が異常 それも 予想以上

『距離600』

「ニーナ…もう良い…」

聞かなくても解る 目の前にいるのだから

思わず笑い声が漏れる 何だ…これ…

「ACの3倍？ これで？」

目前に迫るソレは ニーナの情報より遥かにデカかった

3倍なんて可愛いもんじゃない 控えめに見ても4倍

いや 軽く5倍以上はあるぞ……また 騙されたか？

頭を過ぎる チラツとニーナに目をやる 彼女と目が合う

苦笑いを浮かべる いや と頭を軽く振る それは無いか

まあ 3倍でも5倍でも コツチよりデカイのに変わり無い

ヤツはコチラの頭上を無視するように通り過ぎ 先へと進む

デートをするにも相手が悪い このお嬢様では高望みが過ぎる

いつその事 このまま 『またね』で 帰ってくれないかな……

空しい希望を抱いてみる 当然 その望みは叶えてもらえなかった

彼女はコチラに駆け寄ってくる 遠慮したい……ダメ……？

『…… だったら 落ちるまで付き合いましょ……』

溜息一つ 覚悟を 決める

「ニーナ ヤツとの距離を」

『はい 距離900』

900……思わず自分の両手を眺める

攻撃はまず届かない 当然か

通常の武器でもそれは同じ事

届くとしたら それはスナイパーライフル位のもの

それに反して コチラの手持ちはブレードのみ

少しばかりの後悔

ニーナの瞳に非難の色が混じる 『それ見た事か』 と

苦笑い一つ 目線を上げる お嬢様を見上げて考える

「さて どう口説くか……」

瞬間 突然の破砕音 何かが弾けたような音

眉をひそめる 目を凝らす 数個の輝きが瞬く

更に数度 奇妙な音は続く もう一度 目を凝らす

光りの塊 白煙の束 あれって……

「 ヤバッー!! 」

気付くのが遅れた いや むしろ考えたくなかった

さっき聞いた ニーナの説明を思い出す

『本体上部 左右に8連ミサイルポット』

左右8発 計16発のミサイルの束

それがコチラを目指して突っ込んでくる

回避 頭に浮かぶ バカを言え

ヤツの持ち手は一つじゃない

もし全弾回避しても次が来る

舌打ち一つ ミサイルが間近に迫る 盾を探す

視線の先 前方に背の高いビル その残骸

両手のレバーを前に倒す 機体が前進する

ペダルを踏み込む ジェネレータが唸りを上げる

ブースターにエネルギーが送られる 火が入る

機体が前進 1歩 2歩 そのままブーストダッシュ

目を付けた残骸まで一気に駆ける

「間に合う……か!？」

目前に迫る無数のミサイル

一発 二発 三発

機体のすぐ脇を掠める

通り過ぎて後方で爆発

それを確認 一瞬目を離す

「ッ！」

目を見開く 思わず言葉を失う

四発目 それが目の前に迫る なんて迂闊

「クソッ！」

舌を打つ 咄嗟に両手のレバーを左斜め前に倒す

機体はその動きをトレースする 左斜め前に走る

頭部の右側 目の横辺りを掠める ギリギリで回避

「なッ?!」

4発目の斜め後ろに…… 5発目!?

この間合い……これは躲し切れない ッ!

? 死?

不吉な単語が頭をよぎる

ダメか 諦めの言葉が脳裏に浮かぶ

だが 突然コア本体から低い呻き声が響く

次いで 青い光がコアから放出 そしてミサイルを撃つ

コアに内臓されたミサイル迎撃システム 思わず拳を握る

ミサイルが機体に被弾する その直前で爆ぜる

爆風を掻き分けながらビルの残骸 その陰に滑り込む

直後 立て続けにミサイルがビルに被弾 爆風が舞う

ビルが軋みを上げながら揺れる 長くはもたないか

唯の石の残骸が あれだけのミサイルの雨を食らって耐えられる筈が無い

素早く視線を巡らす 更に前方のビル ブーストを全開にしてその陰に飛び込む

その直後 後方で ビルの残骸の崩れる音がした

グレイ・クラウドは いつの間にか頭上 真上にいた

当たり前だが 自分の真下にまではロック出来ないらしい

少しホツとする 深く息を吸い込み 大きく息を吐く

とりあえずの休息 体勢と息を整える 気が緩む

『 … 馬鹿 』

小さくニーナが呟いた

それは彼女の静かな警告

ハツとする が 遅かった

『 ！？ 』

奇妙な機械音 続いて閉じられた複数の瞳

一瞬 思考と時が止まる 甘かった……

「^{ヒット}小型自律兵器・・・?!」

叫ぶと同時にその瞳が開いた そして針が飛ぶ

いや 針のように細かい 無数のレーザー

声にならない悲鳴を上げながら 必死にペダルを踏み込む

ブーストダッシュ 向かう目標など決めていなかった

ただ あの群れから逃げ出すためだけに走らせる

後方を見る ビットの姿が消えていた 前方に視線を戻す

「早いッ!!？」

目を見開く 既に目の前に回り込んでいる いつの間に!？

迷わず両方のレバーを右に倒す そしてペダルを踏み込む

ジェネレータが勢いを増す ブースターが火を噴き加速する

瞳の脇を抜ける 足元でレーザーが弾ける 敵の反応が早い

機体の後ろにへばり付かれている

「シッコイんだよ!!」

叫びながら急停止 そして前方を向いたままバックダッシュ

虚を衝かれたビットは動きを止める

このまま逃げ切って……

「……え？」

重い音が響く 機体が動きを止める 頭の中が白くなる

ニーナが溜息をついた 恐る恐る背後に視線を巡らす

「しま……ッ」

背後にはビル　その残骸　機体を優しく抱き止めていた

そして足元に影が生まれる　砂漠の砂に無数の影

今度も　恐る恐る仰ぎ見る　そして奴等と目が合った

2度目のシャワー　機体も悲鳴を上げる

歯を食い縛りながらペダルを踏み込む

何度目かのブーストダッシュ　逃げる逃げる

かなりヘヴィな鬼ごっこ　捕まったらそこでオシマイ

後ろも見ずに滅茶苦茶に走る　暫くして　あれ……？

思わず立ち止まる　鬼がその役割を放棄したのか追って来ない

後ろを振り向く　小さな爆発　それが連続して起こった

それは唐突な終了　ビットの稼動時間が切れたらしい

今のうちとばかりに　手近な建物の　その陰に身を隠す

暗がりの中で　唯一煌々とするモニターに目を向ける

機体の破損率50%　半分持ってかれたか　唇が歪む

「
…十分だ」

まだ
戦える
…

- Mission 1 - 存在しない選択肢

予想以上に激しいデート

コチラの身にもなって欲しい

まずは2枚 彼女の手札は見せてもらった

……どちらとも 出来れば2度と見たくない

あと2枚 EN系のマシンガンとグレネード

「出来ればこのまま スタンド（おあずけ）でお願いしたいな……」

『サレンダー（降りる）は勿論無しです』

珍しい ニーナが合わせてくれるなんて

「解ってるさ……」

彼女の言葉に溜息混じりで応えを返す

状況はあまり良くはない いや かなり悪い

それじゃ と 今の手持ちのカードを確かめる

「……手？ 何を今更」

鼻で笑い 目を向ける 左腕のスペードのA

これが唯一の武器であり 最後の切り札

まずは お嬢様とお近付きになりたい

建物の陰からヤツの姿を確認する

遙か彼方でゆっくりと 旋回を始めていた

それを眺めながら 思わず呟く

「どうしようか……」

それを聞いて ニーナは言った

『迷う必要がありますか？ 貴方の手札は2枚だけでしょ？』

「……………だよな」

まあ 結局の所 使える手札なんて限られている

「それじゃあディーラー カードをよこせ 1枚目は何だ？」

ニーナの雰囲気が一瞬 険しい色を帯びる

「どうせなら 最後までつき合え」 と それを宥める

彼女は諦めたように溜息を吐いて 言葉に合わせた

『 : Overd Boost 』

正解 だが それじゃ足りない

拳で軽く コンソールを2度叩く

「ヒットだ もう1枚追加」

呆れたように 彼女は目を閉じる

『リミット・カット』

そう この2枚 そして右手のブレード ” MOONLIGHT ”

「ついでにさ もう2枚だけ 追加しないか？」

ニーナの目が 訝しむように細められる

『欲を張りますね バーストする気ですか？』

「まだ余裕はあるさ」

ニーナは軽く 首を傾げた

『そのカードは？』

「愛と勇気」

数秒間 ジッとニーナに見つめられる

『随分と儚い手札ですね』

「時には鋼よりも強靱になる」

『現実を見たらどうですか？』

相変わらず言葉がキツイ 思わず肩を竦める

「……まったく お前には夢が足りないよ」

『女ですから』

「……お前だけだろ」

「さて どうするかな……」

そろそろ二ーナの言う ”現実” を見るとしよ

使う手札は決まった ? O・B ? と ? リミット・カット ?

【Overd Boost】

略して ? O・B ?

莫大なエネルギーと引き換えに

冗談みたいな速度を提供してくれるブースター

そして 【リミット・カット】

一時的にジェネレータの限界を毀す事で

エネルギーの際限を無くしてしまう

確かにこの2つを合わせて使えば 或いは
…

しかし 失敗した時のリスクも デカイ

リミット・カットの唯一にして甚大なリスク

数十秒 エネルギーの供給が不可能になる

つまりコチラは 何も出来なくなる

暫しの逡巡 本当にやれるか迷う

1分 2分 3分 だが 考える時間はあまり無かった

状況が…と言うより 彼女がそれを許してくれなかった

二ーナの瞳に 苛立たしげな感情の色が浮ぶ

「
…まあ 他に方法は無い…か」

彼女に向けて苦笑と 両手を上げて見せる

では 何処で？ どのようにして？

思わず ニーナに目で問いかけていた

それに彼女は瞳で答えた 『自分で考える』 と

「……はいはい」

瞳で語りあえるなんて 付き合いも長くなったもんだ

『まだ何も言っていないませんが?』

「嘘つけ」

『罪業妄想ですか?』

「何だそりゃ」

今日は珍しい事だらけだ こんな軽口を叩き合うなんて

「それなら どうする?」

『自分で考えて下さい』

「お前なあ……」

『貴方の仕事でしょう?』

ごもつとも それを言われたら 返す言葉も無い

「解ったよ……」

もう一度 溜息混じりに肩を竦める

そして 「だったら」 と続ける

「だったら 参考までに聞かせてくれ お前ならどう攻める？」

参考と言っておきながら これは単なる興味に過ぎない

第一 オペレーターに聞いたって 解決する筈も無い

『男らしく 正面から行きます』

あの弾幕の中を？ 正面から？ 正気か？

ニーナの顔をマジマジと見る

彼女が何を言ってるかは解る…が

「… 全く 男らしい意見だな」

『ええ 今の貴方よりは』

そのための軽装でしょうに と 彼女は続けた

『…… 解った解った やれば良いんだろ？』

両手を挙げ 呆れた顔で言ってる

「お前がレイヴンやった方が良いんじゃないか？」

『お断りします』

彼女は即座に答えてくれた それに苦笑いを浮かべる

「それじゃ ニーナを信じてみましょうか…っ」と

言いつつ機体の中で軽く腕を伸ばす 首を左右に曲げる 回す

『御自由に 信じるだけならタダですから』

……確かに 信仰するにはリスクのデカイ女神だな ……

…雨が降っていた ミサイルの雨 視界を覆うのは G r a
y C l o u d (灰色の雲) ……

空が輝いていた いや そんな綺麗なもんじゃない

白い煙を伴いながら ミサイルが数発迫る

それを ビルを盾にする事で防ぐ 更に走る

後方で幾つもの崩れ落ちる音が響く

走りながら考える 彼女の言葉を思いだす

つまりニーナはこう言っているのだ

上昇速度はコチラが上 だったらO・Bで突っ切れ

弾幕の雨なんて躲してみせろ そして後ろを取れ

リミット・カットして あとは上からお好きにどうぞと

巨大な雲の上はいつだって晴れてるもんだ ミサイルの雨も降りはない

「 ……上等」

ミサイルが迫る それを手近な建物に隠れて遣り過ぐす

「それじゃ女神サマ」

言いながら 口の端を上げて笑う

「今日のお勧めのデートスポットは？」

『墓の中』

「うるせーよ」

ニーナはその文句を無視し コンソールに目を落す

『少し待って下さい 探してみます』

相手の上を取るにしても 場所とタイミングが命

少しでも間違えば それこそ冗談抜きで墓の中だ

ニーナにはその絶好のポイントを探してもらおう

「時間は？」

『見つかるまでです』

「……オーライ」

次の建物を目指して走る 隠れる

灰色の雲が間近まで流れて来る

ビルを背にその姿を眺める

グレイクラウドが僅かに瞬いた

瞬間 頭部を掠める光の弾丸

続け様に リズミカルな旋律が奏でられる

エネルギーマシンガンの雨 視界を覆う青いカーテン

『まったく 心臓に悪い雨音だ』

手加減って物を知らないのか？

どれだけ撒けば気が済むんだか

残骸の陰から飛び出す そのまま一気に駆け抜ける

光弾が砂地に穴を穿つ　グレイクラウドがENマシンガンバラ撒く

『それじゃ　まずは……』

両手のレバーを左に傾ける　遠くに見える残骸まで走る

ENマシンガンの弾丸が　背後のビルを次々と破壊する

足元で数発　青い光の残滓が弾ける

機体を左右に振りながら　次々迫る弾幕を避ける

いや　数発被弾　舌を打つ　流石に全弾回避は無理か

機体が駆けるたびに　後方でビルの残骸が崩れ去る

もう少しで辿り着く　目的のビルはすぐそこに見えている

不意に　聞きたくなかった機械音　背筋に寒いモノが走る

「読まれてた……?!」

不吉な音　それは予想通り無数の瞳

またしても丸い珠は　頭上でコチラを見つめていた

目的のビルを素通りし　そのまま走り続ける

瞳は追ってくる　このままだとエネルギーがもたない

「……だつたら」

ペダルを思いつき踏み込む　機体が砂上を滑る

長い長い足跡を残す　シートに体を固定させて

次にブレーキを強く踏み込む　機体はそこで急停止

当然　頭上を取ろうと無数のビットが迫る

『……レイヴン?』

死ぬ気ですか?　と冷たい声でニーナが訊ねる

「男らしいだろ?」

満面の笑みをニーナに送つてやる

『それを馬鹿と言っんです』

呆れた調子で彼女は応えた

程なくして　ビットが頭上で狙いを定める

それでも動かない　動くには早い

タイミングを計る　間違えば　終わり

まだまだ　まだ　早い　…

手には汗 背筋を無数の蟲が這いずり回る

心臓が ドクンドクンと何度も高鳴る

…気がつくと 口元が 大きく歪んでいた……

ビットの砲門が開く その間際

目のディスプレイを殴り飛ばす

表示されている文字は？ OVERD BOOST？

ビットから無数の針がシャワーの如く噴出される

それよりも早く 機体が文字通り弾け飛んだ

『…相変わ…らず…へヴィ…』

機体の背部には巨大なブースター

意識ごと飛ばされるほどのエネルギーが

速度となって機体を前に弾き飛ばしていた

そのまま一気に突っ切る ビットを振り切る

視線の先 その上には灰色の雲が浮いていた

その真下を目掛けて走る 後方を確認する

ビットは遙か彼方 追いつくのは無理だ

視線を前に戻す 不意に違和感

眉を顰める 嫌な予感 場が静か過ぎる

それに ENマシンガンが止んでいー

突然の悪寒 それに続いて火花が上がった

『忘れてた!』

巨大なグレネード弾 しかも連射のオマケ付き

呻き声を上げながら それを必死に回避する

辺りに視線を巡らす 盾に出来るものは…無し?!

『突っ込むしかない…ッ!』

火球が迫る 爆煙が上がる 熱風が辺りを包む

ラジエータが目覚めたかのように動き出す

その音からも解る 相当な機体温度になっている

『…あ』

自分で呟いた筈の一言が やけに遠くに感じられた

歯を思いつきり食い縛る 体を固定し衝撃に備える

モニターの向こうで ニーナが一言 『馬鹿』と漏らした

足元が爆ぜた 赤々と燃えるグレネードはまさに業火

機体への直撃は避けたものの 至近距離での爆発

心地良いには程遠い爆風で 機体が大きく吹き飛ばされた

息が詰まる 声が出せない 体中が悲鳴を上げている 当然だ

O・Bの勢いそのままに 砂の上を数メートルのヘッドスライディング

暫くその場で横になる 機体を仰向けにする

「痛……」

頭がグラグラする 目の前がチカチカする

起きたくない このまま寝ちみたい気分だ

『午睡ですか?』

ニーナから 棘のついたモーニングコール

呆れました そんな雰囲気を纏わせながら

「ああ 良い夢が見れそうだ……」

『優雅な事で』

彼女は無表情で そんな皮肉を飛ばしてよこす

「……少しは労ってくれよ」

仰臥した機体の向こうに 本物の灰色の雲

グレイクラウドの股は抜けたらしい

体を動かすのも億劫だが 仕方ない

ブースターを吹かして機体を立たせる

正直な意見 あのまま寝ていたかった

でもそうなれば 次に着くのは花畑か

灰色の雲は遥か遠く アレが旋回してくるまで暫く時間はある

だが 時間切れだ 余裕があるとは流石に言えた状況じゃない

そろそろ答えを貰わないと 墓に逝く前に消し炭になっちまいそうだ

タイミングとポイントは？ その答えを聞こうとして

それを察したのか ニーナが相変わらずの顔で

『私を信用して頂けますか？』

その問いに 思わず「NO」と言いそうになる

そこを 今日一番の努力で言葉を飲んだ

「……ああ 勿論」

『そうですか』 彼女は言った後 『ですが』 と続けた

『本当にやるつもりですか？』

ニーナ自身で言い出した割に 懐疑的な問いをよこす

そもそも もう信じるしか無いだろう 彼女の实力は知っている

役に立ったことは殆ど無いが 立つ時はお釣りが来るほど役に立つ

『無茶が好きですね』

「無理じゃないからな それに…」

口の端を上げ 舌を少し出して告げてやる

『なにせ 女神サマのお告げだしな』

ニーナが口を開きかける それを 手で言葉を制する

『それに 向こうさんがお待ちかねだ』

遙か彼方 グレイクラウドはデートの準備を終えていた

「待たせるのは 趣味じゃ無い」

数瞬の沈黙 徐にニーナは口を開いた

『解りました お氣をつけて』

それに いつもの調子で応えてやる

『 … オーライ』

日は暮れた デートも佳境 ラストはもっと派手に行こう

『さあて………』

パーティーを 始めよう …

- Mission 1 - 今日の終わりに

機械仕掛けの灰色の雲

まるで抱擁をねだるように

巨大な両手を広げ迫る

それを正面から見据える

良いだろう 散々熱いのをもらっただ

そのお返しはキッチリしてやる

レバーを前に倒す 機体が拳動を開始

ジェネレーターが 鉄の心臓が動き出す

エネルギーが機体全体に周り始める

前進する 3歩目で砂を蹴る

疾走する 4歩 5歩 6歩

ペダルを踏む スピードが勢いを増す

ブーストダッシュ 背景が流れる 砂が舞う

寄り道はしない この道 正面から行く

待ちわびたように 遙か頭上で破碎音

巨体から 無数の光りの束が吐き出される

8連ミサイル 構わず進む 目標は決めてある

前方のビル そこに機体を預ける 次の瞬間

衝撃 立て続けにミサイルが訪れる 着弾する

ビルが崩れる 間際に飛び出す 疾走を再開する

モニターに目を走らせる 機体破損率25%

『良かったですね 失敗してもすぐに死ねます』

さらっと恐い事を言う 「そりゃありがたい」

次に青い弾丸 ENマシンガン 幾重もの青い雨が降り注ぐ

機体を振る 右へ 左へ そして ビルの陰へ

「…………死に際からが本当の戦い」

息を吐きながら 何時か言われた言葉を呟く

それはまだ レイヴンになりたての頃に教わったセリフ

ニーナが眉を顰めて

『何ですか？』

思わず笑みが零れる

「こっからが本番って事さ」

再度息を吐く アレが来る 解ってる

そのための休息 エネルギーの回復

以前のような失敗は もうしない

『チャンスは一度 それでもですか？』

唐突に 冷たい声で現実を語る 確かに でも

「一度で十分 何度も付き合う気は無いさ」

チャンスは一度 そう それを掴むか手放すか

それは自分が決める事 自分の腕が決める事

失敗すれば ただ 死ぬただだ 口が歪む

そして不意に訪れる 予想していた目玉が襲い来る

聞きなれた音 見たくも無い カタチ

ビット 幾度も苦しめられた小型自律兵器 イキモ だがー…

「遊んでいる暇は無いんだ 悪いな」

ディスプレイに手を伸ばす コアの背部

巨大なブースターに力が集まる

正面にはビルの残骸 頭上にはビットの群体

力の収束 そして解放 機体が暴れる 右へ弾ける

ビルが一瞬で無くなる 視界が一面に広がる

ビットの姿が遠くなる お別れだ 軽く手を振る

巨大な影が伸びていく そして視界を覆う灰色の雲

間髪入れず グレイクラウドの両手が炎を射出

吐きだされる塊 身を焦がす幾つもの熱が 目の前に迫る

それを左へ右へ 機体を躍らせ回避する 相手は炎の円舞曲

そのままグレイクラウドの真下に飛び込む

砂煙が激しく舞う 砂を擦りながら機体を反転

「良い眺めなこと」

巨大な尻が目前に 徐々に遠ざかっていく

デートの相手は挑発するように腰を振る

「ニーナ 後は任せる」

ニーナは静かに頷いた

ディスプレイに手を伸ばす

“リミット・カット”

途端 コックピットの中に警告音が鳴り響く

時間が無いぞ 時間が無いぞ 急げ急げ と鳴り響く

解ってる 解ってるって そう慌てるな

胸が高鳴る 手が汗ばむ デートも終わりが近い

もう一度 ディスプレイに手を伸ばす

機体の背後に再び力が溜まる 一拍おいて機体が弾けた

歯を食いしばる 地面を滑るように機体が疾走する

グレイクラウドの尻が一気に近づいてくる

ニーナに目を向ける だが何も言わない

グレイクラウドが迫る だがまだ遠い

ニーナに目を向ける　彼女が目をそらす

なぜ？　それを問い質す余裕はない

体中の骨も筋肉も悲鳴をあげている

グレイクラウドに迫る　だがまだ向こうが早い

あと少し…あと少し…近づけ…近づけ…

時間が迫る　警告音ががなり立てる

このままでは時間切れ　それ以上に体がもたない

少しでも気を抜くと意識が刈り取られそうになる

今ならまだ間に合うか？！　ここで跳ぶべきか？！

だが　タイミングを間違えば全ては水の泡と消える

逡巡

それも一瞬　腹に再び力を入れる

ニーナを信じるって言っただろ

自分にそう言い聞かせる

時間切れまで残り半分　だが　半分あれば十分だ

「ニーナ!!」

叫ぶ ディスプレイに目を落とす

俯いたままのニーナが 不意に顔を上げた

冷たい機械のような瞳で 彫像のような口で 彼女は言った

『今です』

突然の轟音 グレネードの火球がグレイクラウドを直撃

ニーナの合図とまったく同じタイミングでそれが起こった

「なっ!?!」

突発的な事に思考が僅かに混乱

それはグレイクラウドも同じだったらしい

動きが僅かに鈍り 高度が落ちる

『レイウン』

ニーナの静かな一喝に 混乱を投げ捨て体が動く

機体が地面を蹴る 跳ぶ そのままペダルを一杯に踏み込む

重力に逆らい高速で上昇を続ける 何の制限も無い灰色の空

「……アレ……は？」

目の端に何かが映り込んでくる

1体のAC ビルの影になっている

それは本当に 一瞬見えた その程度

あれがグレネードを撃ち込んだのかな

頭の端でそんな事を考え……

……ミル……ナ……

「……え？」

……視界が 青い

この青さは見覚えがあった

? L S - M O O N L I G H T ? 最高と賞されるブレード

その青を呆と眺めていた まるでニーナの瞳に似てるな

そんな事を考えていた 意識が宙に浮いているような感覚……

ああ そうだ そうだ このブレードを 早く突き立てないと

……突き立てる？ 何に？ 何で？ と言うか 今 何をしてー…

『そのまま死ぬ気ですか？』

その冷たい声で 意識が一気に覚醒した

直後に足元で爆発

「何が起きてツーー?!」

理由も解らぬまま 後ろに跳ぼうとして 後ろが無かった

視線の先にはただの虚空 機体は宙に投げ出され

真下にあるのは茶色の世界 砂だらけの人の残した残滓

機体の右手を反射的に突き出す ブレードが突き刺さる

目前にグレイクラウドの顔 図らずも熱い口づけを交わす

自分がグレイクラウドの上に乗っていたんだとやっと理解する

今は足場はなく機体は宙ぶらりのまま 支えるのは右手のブレード

火花をあげる機体の右手 このままじゃもたない

そう認識した後は早かった頭よりも先に体が反応していた

ブレードを突き立てたまま重力に逆らわず地上へと落ちる

そのまま真下にグレイクラウドを切り裂く

破片が飛ぶ 火花が散る 光りが舞う 雲が裂けていく

奇麗な断面 その隙間から ソレの内部が伺えた

厚い装甲 鉄の集まり それが今は ガラクタの塊

そして グレイクラウドの姿が 視界から消えた

機体は完全に支えを失う 浮遊感が身を包む

見上げる ヤツはまだ 上空を漂っていた 雲のように

腕を軽く振る エネルギーの供給を断つ 青い刀身は消える

” MOONLIGHT ”の口が閉じる まるで 眠りにつくかのよう
うに

不意に響く爆発音 その音は 徐々に下へと落ちて行く

機体の頭部の女性の声が 仕事の終わりを静かに告げた

「 終わった……? 」

目を閉じて呟く 疲れきった体を操縦席に投げ出す

外を見る かなりの高さまで連れてこられたようだ

『お疲れ様でした』

二丁の 味気無い声を聞きながら

「ああ お疲れさん 今回は感謝するよ」

頭の後ろで手を組んで 片目を瞑って応えてやる

『……いえ』

暫くの沈黙 彼女と見つめ合う

そして徐に 彼女は言葉を紡ぐ

『どちらにせよ こんな所で死んでもらう訳にはいきませんでしたから』

それはどう聞いても テレ隠しには聞こえない

「ああ そう」

それじゃ お喋りの時間を始めよう

「聞きたい事がある」

『却下します』

「さっきお前は言ったよな？ ”我々” ってのは誰の事だ？」

『言葉の意味そのままです』

「グレイ・クラウドの情報は？ 何処で仕入れた？」

『知る必要は無いでしょう？』

「お前は一体 何を考えている？」

『世界平和を』

と 至つて真顔で彼女は答えた

「……ニーナ 全然笑えない」

『そうですか』

伏目がちに応える やはり無表情だった

肩を竦める 仕方ない と呟いた後で

「だったら最後の質問だ」そう前置き

彼女の瞳を正面から見詰め 真顔で問い質した

「途中から記憶がない…なにがあつた…？」

自分でも意味不明なセリフ 確かに途中まで意識はあつた

だが 気がついたらグレイクラウドの上で ブレードを振っていた

それまでの記憶がゴッソリと 短時間ではあるが抜け落ちている

そんな困惑をよそに 彼女はやはり冷たい声で

『貴方は仕事をしていました それだけです 他には 何も』

そう答えるだけだった

『貴方は……』

最後に 確かにニーナは呟いた

気のせいかとも思うほど小さく

だがその呟きは 上空の爆発音に掻き消される

『お疲れ様でした レイヴン』

聞き返そうと 口を開くよりも早く

ニーナは別れを告げると

『それでは また』

味気の無い機械音を残し 回線が閉じる

一方的な会話の終了 話す事はもう無い と言う事が

溜息一つ 余計に謎が増えただけ 答えはまだ無い

恐らく 次に聞いても答えてはくれまい そんな女だ

「まあ 良いか」

とりあえずは生きてることだし 良しとしよう

楽観的にも見えるが こうでもないとやってられない

気の抜けた目を 外へ向ける そろそろ地面が近い

ペダルを踏み込む ブースターを吹かす 機体が宙に浮く

着地の衝撃を殺す そして地上に降り立つ

同時に さっきまで鳴り響いていた警告音が消え

エネルギー残量が0を示した

肺に溜まった息を吐く

操縦席に 深く身を沈める

「…………お疲れさん」

コックピット内壁を 軽く叩いて機体を労う

長い一日が ようやく 終わる……

『言い忘れましたが』

「おわっ?!」

突然 ニーナの顔がモニターに映し出された

「……なに？」

戦々恐々 ニーナの次の言葉を待つ

『この後すぐ ”アイレットシティ” に向かって下さい』

「……何で？」

アイレットシティ？ 何でそんな急に……？

『寝ボケているんですか？ 仕事があるからに決まっているでしょう？』

……おいこら

「聞いてないぞ！」

『ですから今 お伝えしました ちなみに企業からの依頼です』

誰が行くか！ そう怒鳴ろうとして それよりも早くニーナがそう告げた

「……それは……つまり？」

『断れば 貴方の食費扶持が減ります』

『……マジ？』

『当然でしょう?』

逃げ道無し 選択肢も無し 嫌がらせか?!

『それと』

それと? それとだって? まだ何かあるのか?!

『明日の10:00までをお願いします 時間厳守です』

「10:00!?!」

『はい それでは お願いします』

それだけ言つと小馬鹿にしたように小さな音を響かせて ニーナは消えた

こつからアイレット・シティまで 何時間掛かると思ってるんだ……

灰色の空を仰ぎ見ながら 思わず呻きを漏らしていた

『へびィ……』

どうやら長い一日は まだまだ続きそうだー……

- Mission 1 - 今日の終わりに（後書き）

これで1つ目が終わりです、こんな調子であと50話ほどあります、時間がある時にでも修正しながらのんびり上げたいと思います、ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

- Mission 2 - 気がつけば 崩壊

「……はい ええ ええ それでお願いします」

女性の声が遠い 誰かに指示を出しているのか

さらに遠くで男の声が「はい」と答えている

「あ すいません ニーナさん」

女性の周りの雰囲気が 慌ただしさを物語っている

それでも態度に機械的なところはなく とても好感が持てる

「準備は出来てますか？ 始めてしまっても良いですか？」

声が弾んでいる どうやら楽しみにしていたようだ

まるで男の子が玩具を買い与えられた時のような印象

『はい お願いします』

そう答えると 彼女は小さく

可愛らしい咳払いを一つして

「それでは 早速ですが」

イリスさんは遠慮がちに切り出した

「本試験は 実戦を想定した模擬戦闘です」

年齢こそ若いが この研究施設の主任なのだそうだ

兵器の開発・運用などを任されているとか

「全機破壊までの時間に応じて 追加報酬をお支払い致します」

サラもこれくらいしつかりしていれば……

「それでは テスト開始……なんですけど……大丈夫ですか？」

それに引き換え この男は…

思わず 溜息が漏れる

彼の担当になってから溜息が増えたと思う

「ははは」

コックピット中で 突然笑い出すレイヴン

イリスさんは顔を引きつらせている

「あのお レイヴン？」

「ははは 待てえ」

イリスさんが小さく「ひい」と声を上げた

可哀想に あれは怖いというより

気持ち悪がっている表情

「なっ なに?!」

「あはははは」

男はなおも笑い続けている

目はどこか遠くを見ているようで

実に腐った魚の様な眼をしている

「あ あのお……」

「うふふふふ」

怯えるイリスさんに『申し訳ありません』と告げる

レイヴンは未だに虚ろな表情で薄気味悪い哄笑を続ける

この男を見ているといつも思う この男を……

『……したくなります』

イリスさんが小さく「え?」と言って固まり

突然レイヴンが跳ね起きた　そして酷く怯えた表情

その顔があまりにも情けなくて　また　溜息

こんな男が本当に・・・

それでも気が重いというのに……

今日は疲れているのだろう　早く終わらせよう

レイヴンに改めて指示を出そうと顔を上げると

男は何故か　訝しげに眉を顰めながら難しい顔をして言った

「……って……誰？」

駄目だ　この男は　駄目だ

男には何も答えず　モニターをイリスさんに切り替え

『これから行うテストについてですが』

少し怯えた表情のイリスさんに回線をつなぐ

「あつ　はいっ」

少し声が震えているように感じる　何故だろうか

まあ　あの男のせいだろう　あまり気にせず本題に入る

私の質問に いや 半ばお願いに イリスさんは驚嘆した

……まだ 頭がボーっとする

もしかして疲れてるんだろうか……って 当然か

ここは？ザーム砂漠？から東にある都市 ？アイレットシティ？

次は ここで依頼があるから行ってくれ ニーナにそう言われた

しかも 10:00まで との制限付き

グレイクラウドの件を終えて バタバタと行ったり来たり

途中 セントラルオブアース近くで 得体の知れない連中と遭遇

これで時間を無駄にしたが なんとか アイレットシティに到着

到着してすぐに 休む間もなく機体の整備とパーツの交換

これに手間取り時間をロス まさかここまで酷いとは……

最後に組み上がった機体の調整 そして今に至る

途中から寝不足と疲れて意識が飛んでたのか

記憶があやふや 頭痛いし……

そう言えば ここに来る途中で遭った連中

MTやらACの団体さんだが あれはなんだったんだ？

どうもきな臭い感じがする 厄介ごとが起こりそうな感じ

…まあ その事は今は置いておこう 目の前の仕事を片付けよう

頭を数回 掌で軽く叩く まだ目が覚めてないのか

なんか途中で見知らぬ女がモニターに映ってた気もするし

「は?!」

モニターから素っ頓狂な声が上がった

どうも困惑しているようだ この声は記憶が間違っていなきゃ

この地下兵器試験場の女性主任で 確か【イリス】と言ったはず

ここに来た時 一通りの説明を彼女から受けた…と思うんだけど覚えが無い

確か何日か泊まり込みで 新型支援兵器のデーターを採る とか何とか

これが終わったら もう一度聞いてみよう

「……はあ?!」

さっきから何を一人で盛り上がってるんだ？

それになんだその「あんた正気?!」みたいな声

「何を言っているんですか!? そんな…そんな事…

それだと最悪 レイヴンが死んでしまいますよ!?!」

は? 死ぬ?

「か…構いませんって いやでも…死んでしまったら…その…責任が…」

誰と何の会話してるんだ?

それから数秒 主任さんの声が途絶えた

何だかこの沈黙 凄く怖いんだけど……

「それは…こちらとしては願っても無い事です…」

全然話が見えてこない が しかし

なんだかヤバイ方向に進んでる気がする

何せ主任さんの声がセリフと合ってない

「私止めましたよ でも超やってみたい」

みたいな 胸の高鳴りを抑えられない

そんな含みを持った声音で話してる

「本当に宜しいんですか？ 宜しいんですね？」

おいおい 主任さん笑ってるよな アレ……

「……解りました 設定の変更を行います」

何かを変更するらしい 嫌な予感がする

主任さんの後ろから 別な男や女の声で

「本気かよ……」とか「責任は無いんですよね？」とか

「面白くなってきた！」とかはっちゃけてる奴までいる

その歓声にも似たざわめきを 恐らく主任さんだろう

しー！と言つて周りを静めていた そして

「……あの……レイヴン？」

おずおずと 話しかけてくる

「……なに？」

「そろそろテストを始めたいのですが その……大丈夫……ですか？」

全然宜しく無いんだけど 仕事なので一応「はい」と答える

「あつ…い…いえ 大丈夫ならそれで良いんです!」

一気に捲し立てるように主任さん

……? なんか焦っているような…?

「ところでさ 設定の変更って言うのは?」

そう聞くと主任さんは「はうあ!」とか奇声をあげ

「ななな 何でもありません 気にしないで下さい!」

いやいやいや 何でもあるだろ あんた

「いや でもさ…」

なおも主任さんを問い詰めようと口を開きかけた時

小さな電子音と同時にニーナが顔を見せた

『先ほどから何をしているのですか?』

いつも突然出てくるな……

「いや何って 仕事の話し ちょっと質問を…」

『質問など不要です 貴方は与えられた仕事をこなせばそれで良いのです』

まさに二の句も告げられない 相変わらずキツイ

しかし その通りなので何も言えない

「解った 解ったよ んじゃ始めようか」

今日は疲れてるし さっさと終わらせて休もう

右肩を軽く左手で叩く 体中が凝ってる

そりゃこんな狭いところにいれば当たり前か

「……そうだ」

はたと思い出した そう言えば

「ニーナ 一つ聞きたい事があるんだけど」

『なにか?』

「さっきさ モニターに知らない女が映ってたんだけど 知ってる?」

気のせいかとも思ってたんだけど それにしては鮮明だし

だがその質問に ニーナは 深い 深すぎるほどのため息

「どうした?」

「……何でもありません テストを始めて下さい」

なんか怒ってる…？

「…あ…ああ」

何だろ？　なんか悪いこと言ったか？

疑問を抱えたまま　とりあえずレバーを握る

そういえば　今回の仕事の内容って

「ところでテストって　支援兵器の破壊だっけ？」

主任さんはその質問に　どこか落ち着きなく

アワアワといった感じで答えてくれた

「あつ　はい！　4機の支援兵器　？D-1？の破壊です

出来るだけ　早い時間で破壊して下さい　時間に応じて報酬が追加
されます」

「了解」

実に単純で明快　今回はどうやら楽な仕事みたいだ

「では　準備は宜しいですか？」

「いつでも」

「それでは　テスト開始」

んじゃ 張り切って行きま……

「……って オイ」

これは目の錯覚だろうか ついに疲れが目に来たか？

「なあ 主任さん？」

「……はい？」

「なにこれ？ なんか動きが異常に速い気がするんだけど……？」

「…それは…そうだと思います」

「……なんで？」

あれで テスト機体？

その辺のＡＣより馬鹿速いんですけど

「これを 破壊するの？」

「ハイ」

テヘツみたいな感じで返事されても困るんだけどね

「もう少し 遅めにならない？」

「それが このレベルでとの要望でしたので」

誰だよ そんなこと言ったの

……そんなの一人しかいねえわ

さっきの主任さんの困惑っぷりを思い出す

こんな事言う奴は アイツしかいないだろう

肺の中の重い酸素を全力で吐き出す

「……………頑張ります」

前途多難 頭に浮かんだ唯一つの言葉

- Mission 2 - もう一人の・・・

「見た目以上だな……」

あのテスト機 尋常じゃなく速い

軽い発砲音に続き 軽い衝撃

背後を取られ同時に攻撃される

放たれた散弾が 機体に穴を穿つ

そしてまた テスト機は距離を取る

「イヤな戦い方しやがる」

4体のテスト機は 高速で移動している

そのうち近づいてきた1体を斬ろうとすると

背後にいる別のヤツが攻撃する

それに気を取られると また別のヤツから

さつきからこの繰り返し

「支援どころか主力になれんぞ」

忙しなく機動する敵を目で追う

素早く相手の位置を確かめる

前方に1体

左斜め後ろに1体

右斜め後ろに1体

そして 頭上に1体

ちょうど三角形の中心に置かれている これが今の状態

しかも こちらと同じスピードで等間隔でついてくる

まさに檻に閉じ込められている気分

イヤになるほど完璧な布陣

「さて どうするか」

今日2度目の自問自答

頭を悩ましている所に 小さな電子音

それに続いて ニーナの不満気なセリフ

『やる気はあるんですか?』

いきなりだな オイ

通信と同時に 頭上から散弾が撃ち込まれる

前に出てそれをやり過ごす

前方のヤツが後退しながら攻撃

左へ平行に走り これを躲す

敵の布陣が崩れかける がすぐに元に戻る

やる気ね…… はっきり言って

「無い」

呆れているのだろう 小さく溜息が聞えた

『何故ですか？』

二ーナの問いかけは続く 敵の攻撃も休まらない

左後ろのヤツが撃つ

素早く後退

散弾が広がる前にその範囲から離脱する

前方と右後ろからの同時攻撃

左のヤツはまだリロード中

その隙を突いて 左後ろへ跳ぶ

左の敵機に 機体ごとぶつける

案の定 距離を離し機体を避けられる

だがこちらも攻撃を躲すことに成功

「理由ね……」

まあ 疲れている と言うのは確かにある

だが 戦闘になればそんな事は関係無い

理由は別にある それは実のところ……

「あの ニーナさん」

不意に別な方から声をかけられる

突然割り込んできたのは主任さん

少し不安なのだろう 声が落ち着かない

「彼は その 大丈夫なのでしょうが？」

20分以上の戦闘に 主任さんは心配してくれてるらしい

それがとても嬉しくて涙が出そうになる ニーナと大違いだ

「これ以上続けるのは危険です 今日のもう終わりという事で……」

主任さんの嬉しい申し出に 『そうですか』とニーナ

『ところで今回のデーターは 使い物になりそうですか？』

またいらん事を……

ニーナの主任さんへの質問にバツが悪くなる

『はい！D - 1の集団戦闘での記録は十分です』

嬉しそうな声の主任さんと対照的に 冷めた表情のニーナ

「……………あれ？ え?!」

手元のデータを何度も見直す

「変……ですよ……ね……？」

研究員の一人がぼつりと言った

「なんですかこれ」

別なところからも声が上がる

ニーナさんには有益な情報

と言っておいてなんだけど

確かに変だ　これはあり得ない

「何ですか？　この被弾率」

そう　D - 1の攻撃が　ほぼ当たっていない

一見優勢に攻めているようで　実の所は真逆

これは……遊ばれてる…？

「主任さん」

突然のレイヴンの声に　体が跳ねる

「あ…はい?!」

「この上のレベルは　あるの?」

何を馬鹿な事を言ってるの？

これ以上なんて　人間が対処できるわけがない

正直に言うと　このレベルならレイヴンに勝てると思っていた

それなのに…こんなことって…

「……い…いえ　これが現時点で最高のレベルです…」

レイヴンは私の答えに「そう」と言っ

「そろそろ終わりにする 良いかな？」

なんて 簡単に言っ

ちよつと買い物に行っ

みたいなノリで

「終わり…と言っ

「仕事するのさ アレを破壊する」

悔しくて 言葉が中々出

自分の甘さと認識不足に腹が立つ

なにより馬鹿にされたよう

レイヴンなんて 正直時代遅れだと思っ

私達こそ代わりを造れると思っ

「分かりました……」

「了解」

主任さんとの回線を切

さて…と 始めましょう

相変わらず 三角の陣形は崩れない

だったら力ずくで行かせてもらう

素早く左右に目を走らせる

ちょうど良い場所が少し離れた場所にある

レバーを右に倒す ペダルを踏む

右へ平行にブーストダッシュ

もちろん4体とも追走してくる

だが程なくして 甲高い音が響く

右斜め後ろのD-1が壁に機体を擦る

「ちゃんと周りは見ないと」

僅かに体勢を崩した1体に向けて

裏拳を放つと同じ要領でブレードを振る

D-1の半ばまで ブレードは食い込む

振り抜かず わざと食い込ませたまま

腕を戻す勢いで頭上のヤツに投げつける

2体の機体が激しく衝突し体勢が崩れる

それでも布陣を戻そうとする　だが遅い

すでに真上に跳んでいる　そのまま斬る

2つの爆音

一つは投げられたヤツ

もう一つは　斬られたヤツ

残るは前方と左後ろの2体のみ

着地と同時に目の前のディスプレイを押す

そして右斜め前方に一瞬だけ跳ぶ

つられて左後ろのヤツが前に出る

次の瞬間　機体が弾け飛んでいた

OBが発動　一瞬で左後のD-1との間を詰める

そのまま水平に腕を振るう

ブレードの刃が深々と食い込む

そして 先程と同じ要領で残る1体

前方のD-1に目掛け投げつける

「残念」

さすがに これは外れたが

すでに OBは発動している

投げつけたのは ただの目くらまし

距離を離そうと後退するD-1 だが

「遅い」

敵は射程の中 刃の届く致死の距離

D-1を鋭利な青い光が真横に薙ぎ払う

【モクヒヨウ タッセイ】

機械の女性が 仕事の終わりを告げた

「終わった 終わった」

首を軽く回す 鈍い音がした

これで今日の仕事は終わりの筈だ

……終わりだよな？ いや そう願いたい

そこに小さな電子音 通信が入る

思わず体が跳ねる だがー…

「…………あれ？」

モニターに 見知らぬ女性が映っていた

「えっと…………」

それはさっき見た女 やっぱり気のせいじゃなかった

まじまじとその顔を眺める 見れば見るほど美人さん

整いはまさに彫像…いや 雰囲気からすると氷像か？

『目は』

その女が口を開く

『覚めましたか？』

あれ？ この声 もしかして……

「もしかして…ニーナ？」

お互いに沈黙　そしてニーナの溜息

『まだ寝惚けているのですか？　でしたら　もう一つ依頼を……』

「待った！　ちょっと待て！」

冗談じゃない！　これ以上は死んじゃう！

「と言うかニーナ　メガネは？」

そう　確か彼女はメガネをかけていた

それに髪型も全然違う

まるで何処かに出かけるような……

『これですか？』

胸ポケットからいつもの縁無しメガネを取り出し

自然な仕草でメガネをかけた　ああ　確かにニーナだ

『もしかして　本当に気がついていなかったのですか？』

「すみません」

と言うか　これだけ変われば一目じゃ気がつけないと思うんだけど

……

『節穴ですね』

間違いありません 本人です

女つてのはこんなに化けるもんなのか

どうせなら中身も変わってくれば良いのに

やはりニーナは絶好調でニーナだった

「それで？ 何でそんな格好？」

ああ 目が言ってる 『貴方には関係ない』と

軽く肩を竦める 別に無理に聞く気もない

『それでは お疲れ様でした』

相変わらずの素っ気なさ

小さな電子音がサヨナラを告げた

まあ 良いや 今はもう眠りたい

「お疲れ様でした…あの…レイヴン…」

間髪入れずに今度は主任さんからの通信

「どうしました？」

まさか もう一度データーの取り直し？

それだけは勘弁してくれ 心の中で嘆願

「D-1のどこがいけなかったんですか？」

「えっ？」

予想外の主任さんの言葉に 思わず言葉がでない

「何処かに欠陥が無ければ このような結果にはならない筈です！」

泣いてる と言うか キレてる？

「D-1のプログラムは完璧だった筈です！」

ああ 確かに完璧だった でもさー

「逆」

「えっ？ 逆？」

「そう 逆ですよ あれは完璧すぎた」

「完璧…すぎた？」

「ええ 動きが完璧で単調」

そう 最初こそはその速さに驚いたが

よく見ると動きが掴みやすかった

「要するに 囲む 撃つ 離脱 これだけ」

確かに陣形は 完璧だ でもそれが仇になっていた

どこにD - 1がいるか解れば 対処も回避も割りと容易い

「でも これがもし広いトコなら結果は変わってたかも」

「それは何故？」

「障害物が無い」

さっきやったように どんなに完璧な布陣も

障害物があるだけで布陣が乱れるようじゃ

いくらだって浸け込む隙が出来る

それにも対応できなければ意味が無い

「なるほど…」

納得してくれたようだ これで眠れる

「解りました 改良の余地は 十分にありますね」

改良と言うか 人が動かせばどうなるか

あの動きに 予測不能な攻撃 十分脅威になると思う

まあ操縦者本人が　あの動きについていければ　だけど

「今回は　本当にありがとうございました」

そう言えば　テストは数日泊まり込むって聞いたけど

「休憩したらまたテストを？」

眠らせてくれさえすれば　いくらだって付き合える

何より割りと楽な仕事だ　暫くは稼がせてもらえるかな？

「いえ　今回の分で十分です」

だが　期待してた返事とは正反対の主任さんの答え

「このデーターを基に　さらに改良を加えます」

仕事が……墓穴掘った？

「次の改良版の機体が完成したら

その時はもう一度テスト　お願いできませんか？」

そうでもないか

「勿論　依頼さえもらえば」

「ありがとうございます！」

無邪気に笑う彼女は 嬉しそうに楽しそうに

「次ぎこそは 貴方を倒してみせますね!!」

オイオイ 趣旨変わってないか？

「…… 良いや もう 寝たい」

現在の時刻 10:55

日の光を背に 一人 寢床を求めてさ迷う

同時刻 コルナートベイシティ

ファレーン海岸 バレーナ社工場近く

雨が降りしきる中 1体のACが 佇んでいる

いや よく見ると その周りには無数の残骸

元はヘリだった物 もしくは 戦車だった物

無数の鉄屑が散らばっている

その中で 一人静かに佇んでいる

小さな電子音 コールサイン

「ミコト 依頼は終了した データの転送を」

『解った』

ミコトと呼ばれた女性は このレイヴンの成した結果を依頼主へと送る

『かなり早かったけど 途中で切り上げた？』

「いや」

その結果を確かめるように 彼女はデータに目を落とす

戦車 65体

ガードメカ 46体

敵総数111体

『クライツ 残りは？』

？クライツ？と呼ばれた男は静かに首を振った

『それってもしかして 全滅？』

思わず苦笑いを浮かべ

『相変わらず バケモノよね』

ミコトはどこか満足そうにコンソールを数度叩く

『まあ 良いわ データーは転送しておいたから』

「ああ」

その返事を聞いてミコトはまた苦笑いを浮かべる

この男の口数の少なさは 今に始まった事ではない

小さな電子音 それはメールの着信音

それも依頼主である？エムロード社？から

『ねえ クライツ 追加依頼来てるけど』

「内容は？」

『追撃だつて 追い込みかけるみたい』

そのメールは クライツが予想以上の働きをしたため

これに乗じて一気に攻め込むと言う内容だった

『是非もう一度力を貸して欲しい だつて どうするの？』

「悪いが」

クライツはすでに 輸送機に乗り込もうとしていた

「別の約束がある」

『そう 解った じゃ お断りね』

「そうしてくれ」

クライツが乗り込むと 輸送機は飛び立って行った

そして その場には誰もいなくなる

ただ 雨と鉄屑のみが 残っていた

- Mission 3 - 幸せな夢 騒がしい現実

現在 23:15

ニーナはコックピットの中で眠る男を一瞥し 数秒思考した

なぜこの男は こんな所で眠っているのか 意味が分からない

まあ どうせまたくだらない理由なのだろう 考えるだけ無駄か

すぐに気を取り直すと ニーナは徐に口を開いた

『レイヴン 仕事です』

……あう？

間の抜けた声をあげ 寝ぼけ眼を開く

ニーナと目を合わせ そして嫌な顔をした

深夜1:40

？アイレットシティ？からさらに東

極東の都市？フォークシティ？

『依頼の内容は 先程説明した通りです』

ニーナは担当の男を見ることもなく

ただ淡々と文面を読み上げる

『試作品を預かるMTの護衛をお願いします』

それを男は 聞いているのかいないのか

一見すると起きているのかどうかも怪しい

『別のレイヴンが試作品を破壊するために向かっているそうです』

それにニーナは全くお構い無しで話を続けていく

『そのレイヴンを撃退して下さい』

そこまで一気に読み上げると ようやく顔を上げ

『それでは お願いします』

それだけ言うと ニーナは消えた

「…わか…た…」

「アンタが雇われたレイヴンだな？」

ゴツイ2足歩行型MT それに搭乗する

試作品を預かった男は緊張していた

仕事とは言え　なんで自分が……

心の中で恨み節を吐くのはこれで何度目か

たまたまMTの操縦が他より上手かったと言っただけ

MTでの戦闘など　生まれてこの方一度も体験したこともない

それなのに　なんで自分が……

視線は警戒と言うより恐怖に彷徨わせ

パイロットスーツの喉部分を引っ張り

少しでも酸素を確保しようと忙しく

グローブの下では掌がびしょ濡れ

何度も自分の膝で拭いていた

「護衛対象は　俺の機体に積んである」

喉がカラカラなのを　唾液を飲むことでやっと補う

男は重圧に押し潰されそうなギリギリの所で

なんとか意地を張って保っていた

それにしても　と　男は少し不機嫌だった

何度も話しかけてるのに返事もしない雇われ者

「オイ！レイヴン聞いているのか！」

怒鳴りつけてもレイヴンは うんともすんとも言わない

たださつきから 小さく呻き声のようなのが聞こえるだけだった

「オイ！！返事くらいしろ！！」

やはりレイヴンは無言 男は舌打ちをし言葉を吐き捨てる

「おい！何とか言ったら……！！」

そこまで叫んで だが男は言葉を飲んだ

レイヴンの様子がおかしい事に気づく

「……くう……」

男は聞き耳を立てる

呻き……と言つか これって

「……くう」

ちょっと待ってくれよ……まさか？！

「おい？！ レイヴン？！ レイヴン？！」

寝てる！？　寝てるよね？！　ねえ？！

「起きてくれよ！？　なあ！　おいって！」

だが　どんなに喚き散らそうが　レイヴンは起きる気配がない

「レイヴン！　おい！！　レイ……」

ヤバイヤバイヤバイ　もう敵来るって！　来るって！！

男が後ろを振り返った時だった　遠くで光が2・3度瞬く

「えっ？」

男は遠くを凝視し　そして悲鳴を上げた

青い機体が入り口近くで仁王立ちする姿

敵の肩口が破裂する　それに続いてミサイル

白い煙の尾を振りながら　ACとMTに猛然と迫る

「レイヴン！　起きてくれ！！　敵が来た！　レイヴン！！」

MTの男が悲鳴を上げる　それでも動かないAC

迫るミサイルに　MTは咄嗟にACの後ろに隠れる

そのすぐ脇をミサイルが飛び去っていき　爆発

間髪入れずに青い機体が遠くで腕を振る

その腕から黄色に輝く光の刃が文字通り跳びかかる

中距離攻撃型のブレード

白兵戦用のブレードと違い 威力は格段に落ちる

だがブレード部分を飛ばすことで中距離を補える

接近戦が苦手でかつ武装を充実させたいレイヴンが多く好む

青いACもその部類なのだろう 中・遠距離に対応した機体構成だった

だが 接近戦しかできない筈の黒いACは微動だにしない

MTはそんな味方のACを置き去りに壁の隅に素早く逃げこむ

同時に着弾音が響いた 次いで機体が倒れこむ鈍い音

黒いACに その光刃が当たっていた

「大丈夫…か？」

恐る恐るMTの男はレイヴンに問い掛ける

だが 返事はない

「まさか…今のアレで…？」

男は背中に冷たい汗をかいていた

これでレイヴンが終わりなら次は自分

最悪な未来を思い描いていた

「…おい？…おい！？」

突然むくりと黒いACが起き上がる

そのまま敵の青いACを静かに見つめていた

「起きたのか…？」

そのまま緩慢な動作で機体が起き上がり

動き出したと思ったら 走り出した

そのまま 敵に突っ込んでいく

いきなり向かってきた相手に驚いてか

それでも青いACは反射的に黄色い刃を飛ばす

だがそれを 黒のACはあっさりと回避する

そのままブレードを真横に払うように振った

だが青いＡＣもそれをギリギリで回避する

それでも黒いＡＣの動きが止まらない

黒のＡＣはＯＢを発動し 青のＡＣとの間合いを潰す

青のＡＣはそれを迎撃しようと腕を上げる

銃を構え引き金を引く それよりも速く

黒のＡＣは下から上にブレードを切り上げ

青のＡＣの構えた銃器ごと 腕を斬り落とす

そのままの勢いで体当たり 青のＡＣが吹き飛ぶ

飛ばされながらも青のＡＣは負けじとブレードを飛ばす

それを読んでいたかのように黒のＡＣは真横に回避

青のＡＣの側面でブレードを振り上げながら

黒のＡＣにのるレイヴンが雄叫びを上げた

「眠てる邪魔をすんなあああ！！」

青のＡＣは 頭部から肩へ斜めに斬り落とされた

「スゲエ……」

初めて目の当たりにしたＡＣ同士の戦闘に

ＭＴの男は呆然と口を開けて声も無かった

青のＡＣは戦闘の意志が無くなったのか

屍餅をつく形で黒のＡＣを見上げていた

「なんだありや…?!」

それは突然 青のＡＣから射出された

ミサイルでもレーザーでも弾丸でもない

小さなソレに ＭＴの男は目を凝らす

ＡＣに詳しくない男はそれがビットだと理解出来ず

武器なのかどうかすらも分からないでいた

だがそれを見た瞬間 黒のＡＣは走りだしていた

迎え撃つように 小さなモノからレーザーが放たれる

被弾しながらも 回避する程じゃないとばかりに

お構いなしと黒のＡＣが接近し そのままブレードを

小さな無生物 ビットへと突き刺す

小さな悲鳴を上げて それは破裂する

「ビット もう見たく無い……」

レイヴンは心底嫌そうな声で小さく呟いた

そのまま青のACに振り返ると レイヴンは言った

「まだやるかい？」

数秒 2体のACは見つめ合う

徐に青のACは持っていた銃を地面に落とす 響き渡る鈍い音

そのままゆっくりと両手を上げた もうたくさんだとばかりに

回線越しに ふたりのレイヴンは通信を交わす

それをMTの男はどうしていいか分からずただ見守る

「わかった」

黒のACのレイヴンが笑いながら答えると

「行けよ」と 黒いACのレイヴンは言い

「じゃあな」と 青いACのレイヴンは答えた

鈍い音をタテて 青い機体が動き出す

背を向けると そのまま 走り去る

「逃がしたのか?!」

MTの男が驚きを隠さずに問い質すと

「ん? ああ 別に「殺せ」と言われている訳じゃない」

と 黒のACのレイヴンが 悪びれもせずに答えた

「しかし……!」

なおも詰め寄ろうとしたMTの男よりも早く

黒のACの中で 小さなコールサインが響く

『相変わらず 甘い事ですね』

ニーナが話しに割り込む

その声音には 怒った風もない

「悪いか?」

『別に』

ニーナはそれだけを レイヴンに告げた

実際 どうでも良いと思っているのか

彼女から感情を読み取ることとはできない

「ところで 仕事はこれで終わりだろ？」

中途半端に かつ激しい目覚ましのせいか

レイヴンはまだまだ眠そうな顔をしていた

『はい 護衛は完了しました』

MTの傍らに 企業の間人なのだろう

何台かの車両と人間が到着し作業していた

「それじゃ お疲れさん」

『はい お疲れ様でした』

日の光が眩しい

只今の時刻 10:30

カラダが……痛い

体の節々が 変な音をたてる

睡眠不足

中途半端に起きたせいか

無駄に頭が冴えて眠れなくなった

しかたなく街に出て飲みについて

そのあと記憶がなく 気づいたら部屋にいた

変な体勢で寝てたせいか 首まで寝違えていた

今日はこのまま寝て過ごそう

心に決めてからは早かった

そのままベッドで寝直そうと一歩目を踏み出す

不意に 小さなコールサイン

部屋の備え付けの小型のコンソールが鳴いた

『爽やかな朝ですね』

ニーナだった 無表情で言うセリフじゃない

「いや 寝るよ?」

『早速ですが 仕事です』

無視か コラ

『どの依頼になさいますか？』

…？ どの依頼？

「選ぶほど 依頼があるのか？」

やる気はさらさら無かったが

仕事の内容だけは気になったので

コンソールを数回叩いてモニターに映す

へえ 三件か

「この仕事の詳細は？」

はい と言った後 ニーナが丁寧な口調で

『航空機の護衛 戦艦の破壊 それに……』

何気ない会話をするかのような口振りで

『セントラルオブアース襲撃者の排除です』

「ふーん……？」

ん？ セントラルオブアースを 襲った？

「それって……」

不意に小さく着信音

コンソールの右上にメール着信の表示

「……仕事が2件増えた」

『そのようですね』

今度は 向こうから聞いてくる

『一つは？エムロード社？から』

内容は単純 ？エムロード社？が本格的に？バレーナ社？の工場に襲撃を仕掛ける

だが ？ファレーン海岸？に設置された砲台が邪魔 だから先に
行って破壊しろ

と言つのがこの依頼の概要 要するに 露払い

報酬は65000Cと悪くは無い

『もう一つは 排除の依頼ですね』

とあるレイヴンを消すために 力を貸して欲しい

？バローズヒル？へ依頼と称して誘き出す そこを二人で叩く

報酬は2人で山分け 1人頭76000C

かなりの額 にしもロクでもない

『排除の依頼で宜しいですね？』

オイマテ

「こんな依頼は受けないよ」

自信も実力も無いヤツとは組めない

なにより目標の情報が全然無い キケンだ

とりあえず近場の依頼は…露払いの砲台排除

もしくは セントラルオブアースか

……あれ？

「1つ消えた 他のレイヴンが引き受けたのか」

露払いの方は別のレイヴンに取られたらしい

『セントラルオブアースの依頼を受けておきました』

「まだやるなんて言っていないんだけど……」

勿論 ニーナは黙殺 淡々と依頼の受領作業をしていた

朝の爽やかな空気をも濁らすほど深いため息を吐く

まあ 良いか 少し気になる事もあるし……

「セントラルオブアース襲った奴らな 恐らく見かけた」

『いつ?』

「アイレットシティに向かう途中 たまたま森の中で」

へりの中から見ただけだったけど うまく偽装してた

セントラルオブアース襲うためにいたのか 納得した

『それではセントラルオブアースに向かって下さい』

「了解」

目指すは中枢都市 ? セントラルオブアース?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562y/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

2011年11月30日17時45分発行